

●言語文化教育研究 国際研究集会 in ハノイ

(2019年12月7, 8日, ベトナム: ハノイ)

報告者: 山下 悠貴乃 (十文字学園女子大学, 参加者)

2019年12月7日と8日にベトナム・ハノイのタンロン大学にて、ハノイ日本語教育研究会と言語文化教育研究学会の共催で、言語文化教育研究国際研究集会が開催された。ベトナムだけでなく、日本、韓国、フィリピン、ウズベキスタンなど、各地から、約200人の参加者が集まった。

今回のテーマは「学習者・教師の学び合い」で、近年アクティブラーニングやピアラーニングなど学習者同士の学び合いに関する取り組みが盛んに行われる中で、もう一度その理念や実践を見つめ直し、学習者同士だけでなく、教師同士の学び合いにも目を向け、日本語教育に関わる多様な人々の協働について検討するという趣旨であった。基調講演の他、口頭発表、ポスター発表、パネル、フォーラムがあり、非常に充実した内容であった。

基調講演は1日目と2日目でそれぞれ2件ずつあり、1日目は、早稲田大学の舘岡洋子先生が協働の学びの場のデザインを問い直す」というタイトルで、これまでの実践を振り返りながら「協働」とは何かをお話しくださり、ハノイ大学のギエム・ホン・ヴァン先生が「観光日本語」授業でのアクティブラーニングの導入事例をご紹介くださった。2日目は、タンロン大学のグエン・ティ・オワイン先生が越語（ベトナム語における漢字の音読み）の知識を利用した学習法の実践事例をご紹介くださり、目白大学の池田広子先生が教師が自身の実践を協働で振り返ることの重要性をこれまでの取り組みを振り返りながらお話しくださった。この中で特に、舘岡先生が「教師は支援者から参加者へ」「学習者が提案しやすいように穴を作る」とお話しされたことが印象に残っている。こういった姿勢こそが、学習者の主体性、自律性を育むのだと強く感じた。筆者は「自律的な学び」を研究対象にしているため、自身の取り組みを問い直す一言だった。

発表では、学習意欲が著しく低い学習者を内発的に動機づけるための授業設計についての実践例の紹介や、日本語教育を経験した日本語母語話者において、ノンネイティブ教師との協働経験がその後のキャリア形成にどう影響を与えたかに関する発表などがなされた。前者は、学習者の学習意欲を内発的に動機づけるための手法が丁寧に紹介され、その手法が大変参考になった。後者は、教師の協働活動そのものではなく、協働経験がその人にどう影響するのかに注目するものであり、他の教師との協働経験を持つ日本語教師経験者が、教師以外の仕事に就いた時にそこで経験の意味づけて応用している点が興味深かった。また、ベトナム国内での取り組みを取り上げたものも多くあり、技能実習生に対する日本語研修など、ベトナムの日本語教育現場で今起きていることや、教材や教科書に対して現場で求められていることなど、文献などでは知ることのできない情報を得る貴重な機会となった。具体的な発表内容は、プログラムを参照されたい。

<http://alce.jp/meeting/07/proc.pdf>

発表テーマとしてだけでなく、この研究集会中にも「学び合い」が参加者同士の間で実現できるよう、様々な仕掛けが施されていた。例えば、発表時間 20 分、質疑応答 20 分と質疑応答の時間が十分に取られ、また、開会式の時に主催者から、この研究集会は堅苦しいものではなく、実践を

報告しあい、今後より良いものにしていくための意見交換の場にしましょう、という呼びかけがあったことで、非常にアットホームで、発表者と参加者が一緒に場を作り上げていく雰囲気が出てきたように思う。また、「つながり∞（無限大）プロジェクト」という企画では、参加者に事前に自身の研究の紹介、今後やってみたいコラボレーション、自身が出来ることが書いてもらったものを会場に掲示し、研究集会中に参加者が付箋にコメントを書いて貼るといった参加者同士のつながりを促す仕掛けも用意されていた。参加を通して、学習者への動機付けがなかなかうまくいかない、自律的な学びを育むには、など、同じ悩みや興味関心を持つ研究者と意見交換をすることができ、帰国後も、そこで知り合った研究者から自身の取り組みの例をまとめた資料を送っていただいたりした。ここで得たつながりを今後も発展させていければと思う。